

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
毎月一回・十五日発行

(通第一一二号)

目次

- | | |
|----------|----------|
| 真俗二諦の交渉 | 近角常観(1) |
| その名号を聞く | 花田正夫(7) |
| 韋提希夫人(三) | 福島政雄(9) |
| 富田伴作翁遺詠 | 聚墨生(13) |
| 信仰書簡 | 清水凡禿(16) |
| 正信偈解 | 白井成允(19) |

慈光

第十卷

第七號

真俗二諦の交渉

近角常觀

しんぞくじたいといふ問題は、頗る簡単に説明することが出来
るなれど、眞実にこれを了解することは容易ではない。特に誤謬に陥り易き傾向がある。

世間普通に言い慣れた説明には「眞諦門とは未来の一大事にして、如何なる逆惡のものと雖、如來は救濟したまふことである。俗諦門とは、この如く決定したる已上は、人道を守り、倫常を重んじ、家庭の平和、社会の秩序を来すべきである」といふ。

然るに、此種の説明に二箇の誤謬がある。第一には眞俗二諦、各々その範囲が別々になつて考へらるる処がある。即ち、眞諦門は後生の一大事にして、俗諦門はこの世間の道といふやうに考へられる。それだから両者が無交渉に終りてしまふ。全体、此世に於いて、我等が行ひし行為が、即ち未來の結果を来すとすれば、実は現世日常の動作が、即ち未來の問題である。然るに俗諦門では人道を守り、倫常を守り、倫常を重んずべきである。

かかるに果して人道が守れるか、倫常が重んぜらるるか、一つも不可能である。然るに、如來は其俗諦の行ひ得ざる者を憫みたまひて、その行ひ得ざるところが可哀想なりとて、慈悲の極りなきことを我等に届けて下さるが、本願の不思議である。しかもそのお慈悲が一往再往で止むべきでない。遂に眞実ならざる私をして、遂に御眞実を知りてお慈悲をいただきたる時、常に懺愧と感謝の生活が實現するのが俗諦門である。

らして下さるまで、眞実を続けて下さるのが眞の救濟の意義である。
かくの如く、私の罪惡の奥底まで見透して、見捨てぬ如來の御慈悲を頂ければ、「不斷煩惱得涅槃」で、ただに罪惡が解けるのみならず、胸中はお慈悲を以て満たされて来るのである。そこでそのお慈悲の力が身にあらはれて实行するのが、眞の俗諦門である。故に俗諦門は、我こそ俗諦門を行ひつつあると思うて行ふのではなく、一たび罪惡を自覺してお慈悲をいただきたる時、常に懺愧と感謝の生活が實現するのが俗諦門である。

或人が僧侶として道心を起さねばならぬと考へて、常に道心ならんとするも起らず、方袍円頂の姿に恥ぢて、日夜一家和合せしめんとするも能はず、父母に孝ならず、兄弟に友ならず、如何にせんかと苦しみたる時、法然聖人の選択本願を述べたまふ所に、發菩提心を選び捨て、孝養父母を択びすてたまひしをききて、法藏因位の昔、この道心の起らざる、孝養父母の出来ざる、我が根性を見透して、五却思惟の願を起したまひしかと哭泣した人がある。「弥陀五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかただけなさ

よ」と、聖人が常に御述懐されたのが、實にこの御自督である。

如來は、五逆、十惡の悪人、五障三從の女人をたすけたまふといふことは、何人も承知はしてゐる。しかしながら、その五逆十惡の悪人が私である、五障三從の女人が自身であるといふことが分らぬ。それ故一般のための本願の如く考ふるやうになる。故に上すべりをして自分一人の為とはいただかぬ。恰も薬の効能書でも読むやうに承知して居るばかりである。この薬は妙薬にして、如何なる難病といへども、即ち治すといふことは承知して居る。法然聖人の御弟子三百八十餘人、何人と雖も、選択集の意味を知らぬものはない。又法然聖人より直接御教化を蒙りたることなれば、發菩提心の出来ざる、父母孝養の出来ざる、破戒無戒、愚痴無智の輩を、助けたまふ本願といふことを知らぬ人はあるまい。

又現にその選択本願念佛を行いつつある。即ちその妙薬を服用しつつあるのである。而もその頂き心地が間違つて居る。その様な病人ですら、全治する妙薬なれば、我は未だそれ程までも危篤にはなりて居らぬなれば、必ず効験があるであらうと思うて服用しつつあるのである。いはゆる「悪人なほ往生す、何ぞ況んや善人をや」といふ見地であ

常を重んぜよと教へつつ、眞諦門では悪くとも救濟せらるると教ふる時は、たしかに矛盾である。

この如く、眞俗二諦同一の範囲、即ち全人生の上で云ふときは、たしかに両者の矛盾が起るのである。ここに第二の誤謬を正さねばならぬ。即ち救濟の意義が不徹底なることである。救濟といふことを悪くしても仏より許さるるといふ様に理解する人が多いのは大なる誤である。我等は決して悪くてもよい筈がない。即ち俗諦の教ふる如く人道を守り、倫常を重んずべきである。

しかるに果して人道が守れるか、倫常が重んぜらるるか、一つも不可能である。然るに、如來は其俗諦の行ひ得ざる者を憫みたまひて、その行ひ得ざるところが可哀想なりとて、慈悲の極りなきことを我等に届けて下さるが、本願の不思議である。しかもそのお慈悲が一往再往で止むべきでない。遂に眞実ならざる私をして、遂に御眞実を知りてお慈悲をいただきたる時、常に懺愧と感謝の生活が實現するのが俗諦門である。

る。如何にも悪人を助ける本願なればとて、善を為してならぬといふことはない。出来るだけは善を為すべし、戒も持てるなれば、持戒も可なり、發菩提心も可なり、などいふ考である。真諦門で未来の一大事につきては悪人をたすけ給ふなれど、俗諦門では立派に人道を重んじ、倫常を破らざる善人たり得べしと、考へるのが即ち是である。

然るに親鸞聖人は、その發菩提心の出来ざるものとは我事なり。破戒無戒の徒といふは我身なり、といただき給ひしなり。そくばくの業をもちける親鸞なり、この親鸞一人がための本願にてまします。

効能書を見て妙薬なることを承知して居ることと、自分がいよ／＼其病にかかりたる時、初めて此薬はわがためなり、難病人とは我身なりと、自覺したることは、大なる相違である。

如來の本願は惡しきものを救ひたまふければ、惡をしてもよいと云ふのは、所謂藥あり毒を好めといふ風情である。であるから、惡を為すな、毒を食ふなではない。すでに／＼惡の極をつくし、毒を食ひつある身ではないか。十惡五逆の悪人を助け給ふければ、まだ悪いことをしてもよいと考へて居るのが、我身が十惡五逆の悪人たることに気づかぬのである。惡をしてもよいと云うて、邪見に陥

りて、惡を為すなではない。惡をしてもよいと云ふのは、なほなすべき惡の餘地があると思ふからである。すでに、惡の極をなし、つてある汝にあらずやとの仰である。難治の病人さへ救はれる故に、我身はそれ程になき故にたすかると思うて居るが大なる誤である。

我実にその難治の病人である。難化の三機、難治の三病といふのが、即ちこの愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑しつつある親鸞のことである。本願醍醐の妙薬は、實に濁世の群生、穢惡の庶類たる親鸞自身のためである。阿闍世といふは。即ち親鸞のことである。煩惱を具足せる者と仰せられたのは、即ち五劫思惟の昔かねてよりこの親鸞のことを仰せられたのである。他力の悲願はかくの如きの吾等がためなりけり、偏に親鸞一人がためなりけり。

或人が、發菩提心の起らぬ、孝養父母の出来ざるは、我身の上なることを、今更の如くに驚きたるは、實にこの一点である。他人の事ではない。或人の事でない、實に私自身のことである。實に私自身の為に起したまひし本願である。私自身の為に御出世下されし親鸞聖人である。五劫思惟、永劫修行の一念一剎那も、皆私自身の為である。紙子の九十年、流罪も侮辱も、皆私自身の為である。弥陀の修行も、聖人の御苦勞も、一分一厘も、人のためでない、皆私の為である。思へば／＼恩寵深き我身の上である。

自分たることを知らずして、悪くてもたすけて下さるからというて、なほまだ惡しきことをする餘地の残りて居るやうに思うて居る、我身知らずである。

併し、言ひ換へたならば、五劫思惟も、九十年の御苦勞も、皆私が悪いばかりに、御心配をかけたのである。若しや私の罪が一分でも少なければ、五劫永劫の御苦勞が減じたであらう。如來不可思議兆載永劫の御修行中、清淨真実の三業の、一念も一剎那も、皆私の不清淨不真実を見捨てたまはぬ御心ならぬはない。老親白髮の一莖も、皆これ私が為の御苦勞にてまします。

世尊の大慈悲、衆のために苦行を修し給ふことは、人の鬼魅に着せられて、狂乱所為多きか如し。

親が狂乱になつたのは、實に子の可愛さの餘りである。熾盛の我等があるばかりに、十劫正覺の方便法身の如來は來現して下さつたのである。南無阿彌陀仏、々々々々。

悪しくてもお助けと、お助けに腰を掛けて、悪くてもよいと横着に流るのは、我身が既に／＼罪惡至極なることを自覺せずして、まだ急すべき惡がある様に心得て居るからである。

葉ありとて毒を好まんとする者は、既に毒の全身を犯しつつあるを氣附かずして、猶毒を好みて食ふべき餘地ある様に思つて居るのが根本の誤である。毒食うて皿までといふ横着心の起るのは、我すでに皿の底まで舐め尽して居る

亦善くせねばならぬ／＼と云うて、我身の惡しきを苦にするは、我身の罪惡を自覺したるやうなれども左様ではなく、我身の罪惡が何とかしてなほよくすべき餘地があるやうに思ふ誤りである。常に言ふ如く、我が身の罪惡を苦にして、これを善くせんと試みるは、修養として貴きことなれども、信仰の上より云へば／＼劫つて我身を善くすることが出来るといふ、高上りをした考である。高慢なる考である。前者の悪くともよいと云ふものが、邪見懈怠の徒ならば、なほ善く出来ると思ふものは橋慢貢高の徒である。懈慢界とは實に適切なる名称である。悪くともよいと腰をかけるものは、親の汗膏の塊を、湯水の如く心得て居る横着者である。善くせねばならぬとあせるものは、親の血の涙を他所に見て、自分でやらうとする遠慮ものである。横着者は邪見に陥り、遠慮者は我慢を募る。

弥陀仏本願念佛

信樂受持甚以難 難中之難無過斯

然も、この「悪くてもよい」といふ考と、「善くせね

ばならぬ」といふ者は、一人の身の上に代るゝ起り来るものである。人が悪しくてもよいと、腰を掛け横着になつて邪見におちいりて居ると思ひの外、矢張りその人の心中には、この様に悪くては困る、善くせねばならぬ／＼と、気を揉むて居る者が多い。この如き人に対し、悪しくてもよいと腰を掛けはならぬと戒めても、劫つてききめがない。そして劫つて、それ程悪しきにもかかはらず、悪くては困る、善くせねばならぬでもない。善く出来る位なら仏様の御苦労はない。善くせんと思へども出来ないところが可愛相であると、その止めんとする惡の止まぬ点、善くせんと欲することの出来ないところを、かねて御承知下されて御見捨のなき御慈悲であることを話したとき、かくまでの御慈悲とはと、あやまりはてて信仰に入り、初めて我身の罪惡を自覺した人がある。

かく深くお慈悲を頂きたる一面は、我身の罪惡の深きを知らされるものゆへに、従来の悪しくてもよいといふ様な横着な考は露塵ほども無くなり、五体を地に投じてあやまりはつるの外はない。その代り兎の毛羊の毛の先にある塵程の罪惡業報をも、こと／＼御見透しありて、全く御見捨てなき大悲深重の御慈悲の前には、心にかかる浮雲もなくなりて、唯々攝取光明の慈懷にをさめられる外はな

い。實に大悲親様の前には、一分一厘の横着な心は起らず、一点一毫も遠慮の考はなく、地獄必定の我は、慈親最愛の恵みに浴する心持は、何ともかとも言ふべからず。実に私こそ天下の大罪人である。亦天下の幸福者である。我一人のための、弥陀仏五劫永劫の御苦労。釈尊の娑婆往来八千度、六方恒沙の諸仏の証誠、乃至大聖權化の方便引入、畢竟するに、私にこの大悲の親心を知らさんが為の善巧攝化にてまします。しかし若しこの超世無上の親心まさすば、たとひ恒沙の諸仏ましますとも何の詮かあらん。わがためには三世十方の中、唯一無二の親様にてまします。十方無碍人の皆帰趣したまへる無碍の一一道は、唯この南無阿彌陀仏にてまします。万徳円備の嘉号、真如一実の宝海である。南無阿称陀仏々々々々。

十方諸有の衆生は

阿彌陀至徳の御名をきき

眞実信心いたりなば

おほきに所聞を慶喜せん。

若不生者のちかひゆへ

信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは

往生かならずさだまりぬ。

阿彌陀仏の御名をきき

歡喜讚仰せしむれば

功德の宝を具足して

一念大利無上なり。

たとひ大千世界に

みてらん火をも過ぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなふなり。

かくの如く絶対無限の大悲に接して、罪惡の根底まで融かされて見れば、人生もはや、何等の苦もなし、唯溢れ来るは感謝報恩の經營のみである。

如來の御慈悲以外に、なほ我等の務むべきものあるときは、それがため未だ感謝の情は起らぬ。雜修の十三失の中に、仏恩を報ずるの念なしといふのが是である。

かの俗諦門を真諦門以外の範囲に於て、別に務むべきもの如く考ふるは、雜修同様に看なすべき俗諦門である。然れども人生全面に於いて真諦門の御慈悲が徹底して見れば、如何なる罪惡も融かされ、如何なる苦惱も救済せられ、六趣四生の因亡し、果滅し、唯大悲の恵みを以て満足せしめらることになる。ここに於て信後に於けるすべての我等の行為は皆感謝の情の顯現である。称名念佛を初めとして、一切世間道に至るまで、皆感謝の情を以て実行する様になる。是れ即ち真実の俗諦門である。

人生の営みが皆信仰の基より健全に実行する感謝の經營である。この信たるや、家庭に於いては親子、夫婦、兄弟相信じ、精神的に一致するの道となり、臣として君を信じ、忠実を尽す臣道となり、政治家には節操となり、婦人には貞節となり、人道もあらはれ、友情もあらはれ、社会の調和、世界の平和、人類の幸福、みなこの純一無雜の如來廻向の信心よりあらはれ出づる真実の俗諦門である。

親として子孫にのこす遺産、財宝よし、学問よし、地位よし、名譽またよし。されど生死を超えて生き得る力、宗教的信念、これを最上となす。

○ 何事も果し得ず未完成のまま、不完全のまま、未整理のまま、出来そこなひのまま、地上を去る我である。詫びることより外に術なき身であることを痛感する。

限りなき父母の恩によりびまされし子の心眼に映するものは、自己の不孝の罪の深さと、親の御恩の偉大さである

そ の 名 号 を 聞く

花田正夫

綱島梁川氏は明治の中頃の人である。生れは岡山県の高梁川の流域であつたところから梁川と号せられた。確か東京外語の先生であつたと記憶してゐる。然し常に病弱で、早くなくなられた方であるが、熱烈なキリスト教の信者で『見神の実験』等々の著書が出版されて、当時の東都の青年学生に非常な影響を与へた方であつた。

然し、段々病気がすゝみ、いよいよ死に直面されるに及んで念佛の教を聞かれるやうになつて、最後の日記『寸光録』にはそのよろこびを誌されてゐる。

さて、近角先生の『親鸞聖人の信仰』の附録に

「私は色々の事柄から此念佛を喜ばせて頂きました。彼の綱島梁川氏は、死なれる前年に於いて非常に此念佛を喜ばれて、何故キリスト教に斯ういふ有り難い言葉が無いのか知らぬ。實に有り難い念佛である、と申されました。これを普通世間的に聞いて仕舞へばそれまであるが、斯く

まで深くキリスト教を味はれた綱島氏の口から申された此一言は実に有り難いと思ひます」と、直接綱島氏から聞かれたまゝを非常な喜びを以て誌されてゐる。

これと反して、明治の文壇で特異の活動をせられた国木田独歩氏は、植村牧師に導かれてキリスト教に入られたが、いよいよ臨終に及んで

「余は祈ること能はず。衷心に湧かざる祈禱は主も容れ給はざらん。祈りの文句は極めて簡易なれど祈り心は難し、得難し。誰か來りてこの祈り得ぬ心を救弁すや。……」

侍床者、毎く五月十三日午后三時独走子病床に泣く。

と、人間としての極限の声を残して空しく終られた。さて独歩氏の言ふ祈りとは、熱心とか、真剣とか云ふ軽いものではない。壞れぬまことである。金剛石と硝子玉と打ち合ふと硝子が碎ける。若し硝子と硝子であれば共に破損す

る。我々は自分を立派に思つてゐるが、実際に大きな問題にぶつかるとか、死に臨むと崩れてしまふ。結局眞実の金剛石ではない。そこを自覺された独歩氏の叫びである。ここは唯一無二の絶対の力があらはれなくつては。相対的人間の力ではどうすることも出来ないところである。

又有島武郎氏の告白に

「嘗ては神を知つたと思つてゐた。しかしそれは本当に神を知つてゐたのではなかつた。知つたと思つてゐたのだつた」といふことが今になつてわかつた」とある。この当座の彼はどんなにか悪戦苦闘したことであらうか。これが転機となつて彼の信仰心は崩壊して、文学に熱情を傾けたけれど、遂に煩惱の跳梁と生活の破綻で自殺を以つて終止符を打つた。「道成寺鱗が肌のぬぎじまひ」が神にはぐれた者の最後の姿であつた。

私は今、梁川氏、独歩氏、武郎氏を次から次へと想ひ浮べながら、今更のやうに『名号を聞くか否か』といふことの大しさを痛感する。そしてここ一つを取りはづしたら、扇子から要を取り除くと同様、大変だといふことを教へられる。

大経のこころ

綱令一生造惡の衆生引接のためにとて

名号不思議の海水は、逆説の屍骸もとどまらず

称我名字と願じつつ 若不生者とちかひたり
小経のこころ

五濁悪時悪世界 濁悪邪見の衆生には

弥陀の名号あたへてぞ 恒沙の諸仏すゝめたる

觀經のこころ

極悪深重の衆生は 他の方便さらになし

ひとへに弥陀を称してぞ 净土に生るとのべ給ふ

その名号とは、一生造惡の衆生、濁悪邪見の衆生、極悪深重の衆生、眞実の祈りの出来ない、鱗が肌のぬぎ仕舞ひの者にこそ、あらはれたまゝ、唯一無二の救済の御手である、絶対の光明である。釈迦仏をはじめとして、三世十方の諸仏の、異口同音に、悲心切々、火と燃へての御勧めの御名である。

祖聖親鸞は、よきひと法然聖人の仰せに「ただ念佛して弥陀にたすけられまあすべし」と聞きとられたのであつた。然も「いづれの行も及び難き地獄一定」の身に聞きひらかれたのであつた。「さればそくばくの業を持ちける身にありけるを、たすけんと思し召し立ちける本願のかただけなさよ」と随喜渴仰せられてゐる。

衆惡の萬川帰しぬれば 功徳のうしほに一味なり

十方諸有の衆生は 阿弥陀至徳の御名を聞き 真実信心いたりなば おほきに所聞を慶喜せん

三国七高僧の方々は、釈迦、弥陀二尊の本意を深く身に

韋提希夫人

人(三)

福島政雄

さて今申しましたやうに、韋提希夫人はこの時に、いよいよ御信心がひらけたと申しますか、心持がひらけて、すっかり態度が變つて来る。この態度が變つたところの韋提希夫人の姿が、今度は涅槃經にあらはれてくるのであります。

親鸞聖人が教行信証の信の巻に御承知の如く阿闍世王入信のところを涅槃經で長く引用しておいでになります。これは私としても非常に思出の深いところであります。前に申しましたが、私が初めて親鸞聖人の御教に心が転じて参りましたのが、近角先生のお話をうかがつてからであります。

ますが、それがこの信の巻の阿闍世王入信の文といふところをずーと刷つて皆におくぱりになりまして、そして一週間ほどこれについて非常に熱心なお話をして下さったのであります。夏期求道会であります。

さうでありますからして、私が最初に親鸞聖人のお教に転ずる御縁になつたのが、阿闍世王入信の文、近角先生のお話と、かう云ふことになつてをりますからして、非常にこの私として感銘の深いところであります。

この信の巻、そこを拝読して居りますといふと、阿闍世王が今度は非常に苦しみ始める。そこを他のもので見ます

といふと、阿闍世王は、もうお父さんが獄中で亡くなるといふ時であります。そのお母さんの韋提希夫人からう云ふことを聞かされたのであります。丁度阿闍世王の子供、名は何と云ひましたか、その子供に、全身に膿血がある腫物ができてゐた。その膿を、矢張り父親らしいところをもつて、その子供の腫物の膿を一つ一つ吸ひとつてやつていた。その阿闍世王の様子をお母さんの韋提希夫人が見られまして、お前が小さい時も、丁度これと同じ様な腫物が出来て膿を持ったのを、お父さんの頻婆娑羅王は一つ一つその膿を、今お前が子供の膿を吸ひ取つてやつてゐる様に、お父様がお前の膿を吸ひとつて下さつた、といふことを韋提希は何げなく話される。それが阿闍世の胸にピンときたといふのであります。

あゝさうだったのか。お父さんは、そんなにして自分を育てられたのか。そのお父さんを獄中に入れたのかと、早速しらべると、然しもう時すでにおそくして頻婆娑羅王は獄中で死んで了はれてゐたといふのであります。

さういふ事柄が、先づ阿闍世王に非常な心の転換の第一の芽生えがそこに現れて来たといふことになりませう。そのうちに阿闍世王が、全身に臭い、痛い腫物が出来て、そして熱も高く、非常に苦しんでゐる。

その時、その阿闍世に対する韋提希夫人の態度であります

す。これが大事なことであります。涅槃經を読みますと、本当に簡単に書いてあるだけでありますけれども、然し非常にそこに心をうたれてゐるのでありますけれども、然し非提希夫人は阿闍世をちつとも責めてゐないのであります。前の、信心のひらける以前の韋提希であつたならば、恐らく、阿闍世に対して「そら御覽なさい。お前がお父さんをあんな目に遭はして殺した報いぢやないか」と。然し信心ひらけてのちの韋提希はすっかり變つてゐるのであります。黙つて阿闍世の過去の罪、一言もせめるといふことをせずに、その阿闍世を一心に看病して居る。毎日々々いろいろ膏薬を工夫して、その膏薬を煉つて、阿闍世のその臭い腫物に塗つて看病して居られる。すると阿闍世の方では「お母さん。これはさう云ふ薬をつけられても治るべきものぢやありません。これは、自分がお父さんをあんなにして殺して了つたことを非常に後悔する心持になつて、その心からできた腫物でありますからして、そんなに膏薬をいくら塗つて下さつても、決して快くなりませんでせう」

と云つて、非常に悶え苦しんでゐるのであります。そこに「悔熱」と云ふ言葉を使つてあります。その悔といふのは後悔、あゝ悪かつたと後悔する、自分の後悔の心持からこの熱が出てきてゐるのであります。これはとても治

頂かれて、五逆誘法の生ける屍骸に等しき者、あらゆる惡の限りを身に持つ者に、名号の大海上ここにまします、罪業の限りを転じて功徳の潮たらしめんと呼び続け、念じ続けて下さる。阿弥陀至徳の御名、そこに聞え、信心そこにひらけ、よろこびそこにおこるのである。

べきものぢやありませんと云つて、阿闍世は苦しみ続けるのであります。

そこに例の六人の理屈を云ふ大臣達が次々と現れて来種々の理屈を申します。かねて御承知の通りであります

が、一々私には詳しくそれを申しあげることも出来ませんけれども、或大臣などは、

「それは、普通の人間だと、自分の父親を殺すといふことは悪いことでありますけれど、王様は別であります。王様といふものは、場合によつて親を殺してもいいです」

と言つて見たり、それから、その他

「頻婆娑羅王には前世の業といふものがありましたでせう。その結果あんなになられたのであって、これは阿闍世王の罪ぢやありません」

と言つて見たり、それから

「動物によつては親を殺さなければ自分が産れて来られないといふ動物もあります。それだからあなたがそんなにしてお父様を殺されても、そんなに大きな罪ぢやない」と、さう云ふ風な理屈を並べる大臣が六人程あらはれて来て、次々と理屈を申しますけれど、阿闍世王の心は理屈ではもう何ともならぬ、どんな理屈を云うてくれても自分は

「お父様はちつとも悪いところがないばかりでなく、あ

んな立派な方であつたのを自分は殺して了うた。親を殺したものは地獄におちるといふことを聞いてゐる。怖い。自分は無間地獄におちるに相違ない。この病氣もよくならない……」

と云つて、相変らず苦しんでゐる。そこに最後に現れて来るのが耆婆大臣であります。最初に阿闍世王が怒り狂うてお母さんを殺さうとしたのを諫めたあの大臣であります。「耆婆」と云へばお医者様の神様となつてゐるやうであります。支那國中で、古いところでは、扁鵲と云ふのが医者の名人であつたさうであります。その扁鵲と今の耆婆とならべて、耆婆扁鵲と云へば名人のお医者様と云ふ意味に今は使ひますやうであります。

その耆婆が阿闍世王の心の病を治さうと云ふのであります。それで阿闍世王の前にきて、あんなに申すわけであります。

「あなたが、お父さんを殺した、悪かつたといふその慚愧の後悔の心をお起しになりましたことが、第一非常にいいことであります。

それで今あなたが、さういふ心持で何かみ教を聞かうと思ひになりますならば、今釈尊、涅槃に入らうとなされてゐる、その釈尊のところへおでましになつて、釈尊からみ教をお聞きになることが一番いいことであります」

耆婆大臣の縁によつてその父親の生前の声といふものが、心の奥深くからひびいてきた。それがこの空中の声であります。さうでありますからして、いよく釈尊の御教を聞きたいと云ふことになるのであります。

といふことを懇切にお勧めしてゐる。その時、前に申しました、空中の声が聞えて来る。「仏世尊をのけて餘はよう救ふことなけん」と。阿闍世王はビックリして「空中の声は誰か」ときくと

「私は汝の父頻婆娑羅である。邪見な六人の家来の言ふことなんかを聞いてはならんぞ。耆婆の言ふところに従へ。釈尊よりほかにお前を救うて下さる方はない」と空中の声が聞えて来た。

これは前申しました通りに、まだ阿闍世が若くて純な気持、青年時代の純な気持でゐた時に、お父さんから頻婆娑

羅王が何かこの釈尊の教のことについて一言聞いてゐたのが、心の底に穩れていて、それが今ヒヨツト思ひ出されて来る。これはまあ私共もさうであります。けれども私、四十歳を越えましたる時に理屈を云つて見たりして、氣嫌きげんをそこなつて見たりしてゐたのであります。けれども、あの時親父があんなことを言つたのは本当である。あの父親の誠めもさうであったといふことを、四十過ぎてから父の教といふものが思ひ出されてくる。父が死んでしまつてからもう遅いのでありますけれども、そんなことなのでありまして、矢張りさう云ふ風であります。阿闍世王も純真な青年時代に、ひとこと一言聞いてゐたところの父親の教といふものが、いよくといふ時になつてから、この

ふるさと 山頭火

波音のたえずしてふるさと遠し

年とれば故郷こひしつく／＼ぼうし

ふるさとの言葉となつた街に来た

ほうたるこいく／＼ふるさとに來た

生れた家はあとがたもないほうたる

ふるさとはちしやもみがうまいふるさとにゐる

あめふるふるさとははたしであるく

富田伴作翁の遺詠

詠

墨 生

聚

昭和三十三年一月廿八日、翁は八十歳で念佛の息絶え終られました。常楽寺様の追悼の辞に『信に莊嚴せられた立派なお年寄』と翁の信徳を讃へられましたが、よく言ひ現はされた言葉でした。

翁は永年を教育者として送られ、ことに龜崎では校長として昭和八年まで十五年間勤続せられました。其後は家庭裁判所や、民生委員等々の仕事に關係せられ、人事万端の顧問としてよき晩年を送られました。

翁の聞法の機縁は大正十三年に御尊父の亡くなられた時からで、真宗講話会で聞法を続けられ、戦後は大河内了悟師の提撕を蒙つて居られました。

西の山空に澄みたる夕ひかり

わが世のはても かくあらまほし

これは数年前の翁の述懐であります。

○

さて本年の正月三日は別に異状もなく、御子様や御孫様

も集られて、楽しく賑やかに過され、五日には御病床に大河内師を見舞はれましたが、この時の師と翁の感激は、涙と合掌、いちぢるしいものがあつた由であります。

一月八日に突然、食事が通らなくなり、早速病院に行かれると「胃の噴門部に腫物がある。悪性のものでなければよいが」との警告があり、流動物がやっと喉をこすといふ状態でした。愈々病床につかれたのは十六日からで、其日は見舞に集られた五人の御子様に夫々信心の歌を色紙に書き遺されました。段々衰弱の度も加はりましたが、十九日には食餌不通のまゝに御一族の志を受けられて、八十歳のお祝を済ませました。

斯うして皆様にかしづかれながら廿八日の早朝、やすらかに念佛の息を終られたのであります。南無阿弥陀仏。

翁の遺詠

昭和三十二年十一月頃から粉ひき歌に調子をあはせ、信心のうたを日記として遺されました。

昭和卅二年末の詠

娘化粧も大事ぢやあるが もつと大事な法の道
呼んでくれよと仰せの御名を 呼ばせて頂く氣の軽さ
悲しい時も嬉しい時も いつも言はるるお念佛
慈悲で押し上げお智慧で引かれ 險の力で出る念佛
念佛行者は心の長者 不足知らずに世を渡る
徳の高いは念佛行者 声もすがたも美しい
罪は造れど障りにやならぬ 念佛頂く体となる
庭の桜も冬が来りや裸 罪は淨土で根切れする
おれが／＼で苦勞がつるる 相撲御覽よ皆体あたり御法聞くにも体あたり
面と向いてはお世辞もするが 後姿にや嘘はない
猫に鰯節や解りがよいが 人に御法のもどかしさ
前に現れ後に廻り 御苦勞なさるか私ゆへ
御恩知るとはそりやそらごとよ御恩知らずがわがまこと
油断するなよ自惚根性 御法聞く身の邪魔になる
自力かなはぬこの身の始末 木々の落葉は風まかせ
老人の手足をつくづく見れば 悲喜の念佛に気がやすむ
過去は語らず未来は問はず 一日々々をやすらかに
長の御聞かせ御苦勞様と 嬉し涙に眼が曇る
根づから仏が嫌いなわしも 今じやちよびり惚れ心地
わしは罪の子み親の慈悲が思へて泣けて喜べて

昭和卅三年一月の詠

……末の末までつたへたや……

親のかたみの念佛様を喜ぶたびに親にあふ

先祖代々伝はる念佛 受けてゆづらにや恩知らず

目にも煩惱 耳にも煩惱 口も手足も皆煩惱

足で運んで 目と手で拝み 口に称へて 耳に聞く

読めばほの／＼此身がほてる 俱会一処の石の文字

善は及ばず惡にもなれず 愚痴なこの身を何としよう
明日を頼むはこの身の迷ひ 明日はあつても他所のもの
日毎々々に老若男女 いのち捨うたとおもほんせ

下々のこの身に極最上の御名を賜る有難さ
わしの心の蓋取つて見れば 底に底ある二重底
底が高けりや入量は少し 底を忘れて法を聞く

八十爺でも赤坊にされて 法を喜ぶお正月

長い待望の元旦ひと日 暮れりや束の間夢の跡

何處に居つても其場が法坐 一事一時みな御法縁

? 恩師を見舞ひ三首.....

折角逢うたに胸さし通り 泣いて退く師の御前

胸に焼きつく師の面影を 拝み通して念佛する

掛けた蒲団の衿から覗く 拝み合せた手は仏

煩惱熾盛 剛情なわしも 仏にや負けて手を合す

思や満ちたる私の一生 一つ足らぬが恩返し

何も食へんで只飲むばかり わしは餓鬼道の一丁目

わしの病気は水中の月よ 掬ふ手が無うて手をあげた

罪の報いでかくなる上は 泣くに泣かれぬこの病気

わしの病気に打つ手は二つ 外は養生 内は念佛

聞いてびっくり恥ぢ入りましたお座の古顔 鬼の餌

病氣すりやこそ常平生の 浮気見直し 胸いたむ

医者や薬はこの世のたのみ 念仏尊やあの世まで

名残り惜しさと往く楽しみを負うて病む身が念佛する

取つた齡に病気がそつて 剛情我慢の我が折れた

病氣しようと求めぬ病氣 これぞあなたの世まで

この身は病んでも煩惱だけは 痘知らずの剛情もの
次第自然に欲気が失せて 痘める弱さが忍ばれる

弥陀の本願妙薬もろて 痘氣養ふ氣のやすさ

わしの行く先や十万億土 最早近かる親が待つ

親に貰うた念佛さまと 渡りや世間の道は無碍

勿体ないぞえ念佛さまに お手をひかれてお淨土へ

人にくされ水さされても 念仏様とは手を切るな

今ぢや飲食かなはぬ病氣 念仏一つが身のたより

注射一つでこの身を保ち 生死に立ちては唯念佛

病むは業病すなほに受けて 彼方まかせに医者任せ

お寺参りももう叶はぬが 寝たまゝ合掌ナムアミダブツ

飲み食い出来んが念佛だけは 寝たまゝ称ふ自由自在

病父見舞にあつまる子等が 隣り座敷で大はしやぎ

老母囲んで集る子等が 隣り座敷で大はしやぎ

親子よいものたまさかあへば わしの病氣も治りさう

六畳一間に病み伏すわしは 六字称名 唯歡喜

看病する者ア幾夜もごろ寝 焙いた御飯の味のよさ

ブドウの醤に喉うるほして 妻娘有難う 拝みづめ

アリガタシ—— 阿難付属の念佛する

◎絶筆 アリガタシ——

結構な教を平素は忘れ通しが、今は不思議と聞え通し、

矢張りお護り通しであつたとしみじみ頂ける。合掌

信 仰 書 簡

清 水 凡 禿

本日は突然S子様から貴女様のことを聞かされ、何か貴女様の御手紙についての所感をと云はれましたので、私の感じさせられましたまゝを率直に申し上げます。

先ず御手紙の中に貴女様はやゝもすればみ仏様が私から離れて行くやうな氣がすると書いてをられましたね。それは端的に申しますと、自己反省の足りぬところと思ひます。何となれば自分の現在の苦しみ——それからこの苦しみを生むもの自分の愚かしい行——この苦しみは好まぬくせに、苦しみを受けずにはをられないやうな行しか出来ない自分——このやうに何とも手のつけられない自分と、み教への光のもとに、はつきりと自分のすがたを知らせて頂くならば、この自分の力では全くどうにもならない愚劣な私の上にこそどこどこまでも付き添つて救はずにはおかぬと流して下さるみ仏様の御涙をどうしてそのまゝお受けせずにはられませうか。苦しい時こそ却つて、み仏様は私の上

に強く／＼仇き詰めに仇いておいでになることをはつきりと味はせて頂くことあります。

それから次に、幸福な日暮しを迎へたいとの御希望でございましたね。ところで先づ幸福とは一体どんなものでせうか。世間的に申します幸福とは、財産に恵まれ健康に恵まれ地位に恵まれ美貌に恵まれることではないでせうか。勿論私はそれが幸福でないとは申しません。それも幸福であるには違ひありませんが、しかしそれらは總て時と共に移り変る相対的な幸福であります。決して絶対的なものではありません。財産があり健康であり地位があり美貌であれば尚更よいと云ふだけの幸福でしかありません。従つてそれは倒産をして病弱になり、失敗をし、醜く生れゝば、忽ち消えてなくなつてしまふ幸福であります。

もつと／＼力強い眞の幸福とは決してそんな相対的なものではありません。自分がこの世に生を享けて来た眞の喜

び——何時どんなに苦しく悲しい境遇に出遇つても常に味ひ得る喜び——このやうな絶対的な喜びをかち得た人こそほんたうに幸福な人と申すのではないでせうか。私はさう思ひます。さうしてそれは普段よく申し上げてゐるやうにまた前にも書きましたやうに、苦しみ悩む私の上にたえず付き添つて涙を注いで下さる絶対の同情者——み仏様の御心を得ることより外に道がないことを私は日増しに強く味はさせて頂いてります。

世間の多くの人は先ず何よりも相対的なこの世の幸福を第一にした生活をしてをられます、私は最も肝腎なのは絶対的な喜びであると思ひます。また或る人は先ず相対的なこの世の幸福を獲得したらその後で絶対的な喜びを求めるなどと考へてをられます、しかし私はそれは本末顛倒した考へ方で、先ず何をさしあいても絶対的な幸福を得るのがほんたうではないかと思います。この真の喜びを得てこそ、始めてその上においてほんたうに相対的なこの世の幸福も、心の真底から有り難いものとして私の生活に生きてくると思ひます。

それから、私が何かの折にふれて氣の利いた明るくかるやかな心が起きた時にばかり、み仏様に救はれたやうな気がするには、その私の心が明るくなつたことを救ひのための何らかの足しまへにする考へ方で、それは何等かの機会

に変な暗い気持が起これば、またすぐ破れてしまふことは請け合ひです。金剛堅固の御信心とは、唯私といふ至らぬ者の上に可哀想な者よと流して下さるみ仏様の永遠に変らぬ御涙をそのまゝに受けることで尽きると思ひます。その結果として私がどのやうに變つたとしても——倒へば、喜べたとか、怒らなくなつたとか——そんなことは決して御信心を頂いた証拠ではありません。勿論おのづからさうならなければならない事ではあります、しかしそれを御信心とつかめは崩れるもとです。それは非常に危いことです。

また子供を持ち得ぬといふ御歎きもあられます、それはよく／＼私の妻も味つてゐる世界で、體氣ながら私にもそのお気持はうかゞはれます。實際お氣の毒な事です。全く總てが業因の現れと現在の事実をそのまゝに受けしていくだけであります。けれども世間には、よく前世の業とか云ひかぶせて問題をうやむやの裡に片付けてゐる人がありましたが、しかしそんなあいまいな態度では、ある程度のこところでは苦しみに耐へ忍んで受けで行けますが、いよいよまらなくなると、前世の業もそつちのけにして逃げ出します。

だがそれは当然の事と思ひます。何しろ前世といふものは現在の私の意識内容にはない世界ですから、それにに対する私の責任を感じる程度はまことに薄いわけです。それよ

橋地さんを思ふ

深沢ともよ

橋地さんと私の主人は同じ軍人友達で早くからよく知つて居りました。その後私が家庭問題のいざこぎに行詰つて、切迫した思ひで、最後の御札のつもりで橋地さんを訪ねました。その夜も一睡もしないで明けました。

「奥さん、あなたの病気は重い」

「何处も悪い所はありませんよ」

「いや心の重病だ。昨夜一睡も出来なかつたでせう。さいいわい今日は近角先生の講話日だから一緒に会館にお参りしませう」

と、否応なしに連れられました。然し聞きたい心が起きていません。この夜も一睡も出来なかつたでせう。壇から下りわれた先生が

「今日の話は解らなんだやうだが、九段の仏教会館で明日

午後から話をしますから來なさい……」

と申されました。一向に心が動きませんでした。ところが不思議にも翌日足が自然に九段に向つて、会館に入りました。先生のお話はもう始つて居りました。

「お互に自分は立派な水晶の玉の如くに思つてゐるが、仏様のひかりに照らされて見ると、実は粗悪なガラス玉であると知らされる。それを知らないで、自分はよい、人は悪いとなつて、へだて、にくみ、ねたみ、のろふ……と仰言ることが、一つ一つ胸にこたへて来て、サア私の胸がさわがしくなり、涙が出てやまず、講話が終つた時は涙で膝がひた／＼で、頭も上げられませんでした。ところが珍らしい人だ」と喜んで下さいました。私はその後主人も亡くなり、子供も無く、八十の老婆になりましたが、聞かせて頂いた「仮のおまこと一つ」で心臓かに暮らさせて頂いて居ります。何事も御恩でした。

法悦抄 清水凡秃著

定価 二二〇円
送料 二〇円

京都市左京区高野泉町 香華書館

聚學生「聞き書」

正信偈私解

白井成允

聖德太子の文を誦しつゝ救世觀音菩薩の示現を被り、六角堂を立ち出でたまうたわが祖聖は、恐らく聖覺法印に導かれて、吉水に法然上人を尋ねまるらせた。其はまさしく建仁元年、祖聖二十九歳、師の上人は六十九歳の時であつた。この尋ねは前号に掲げた惠信尼消息に云ふ所の「後世のたすからんする縁」或ひは「生死出づべき道」を求むる尋ねである。後世の助からんすると云ひ、生死出づべきと云ふ、語は異なれども義は一つである。即ち三世に流転する身が永しへに菩提を証せんとするのである、自ら迷ひ他を害ふ身は自ら覺り他を覺らしめ、共に涅槃の常樂に安んぜんとするのである。是れ仏の教へたまふがまゝに人生の理想を成就せんとするのである。此の道を尋ねて二十年勤苦したまうた比叡の峯は、四百年の昔、伝教大師が之を明かさんが為に法燈を掲げたまうた聖山である。而も其處にて感得したまうた所は祖聖晩年の讃歌に

「釈迦の教法ましませど 修すべき有情のなきゆへに

さとりうるもの末法に 一人もあらじとときたまふ」とあるのに由りて偲ばしめられる。釈迦の教法は遺つても、之を修める資格を具へた者が無いから、之を覺り得る者も無い、一人も無い。末法濁世の悲しみ、ひしひしと身に迫る。それですぐ次の祈願が湧く。

「三朝淨土の大師等 衰愍攝受したまひて

眞実信心すゝめしめ 定聚のくらゐにいれしめよ。」

今法然上人に会ひまるらせ、百ヶ日に亘るひたすらなる聞法を経、茲に祖聖は遂に徹して眞実信心を獲、明らかに正定聚の位に入りたまうた。是れ祖聖の生涯に於ける根本回転、第二の誕生の日であつたと共に、亦、日本民族の精神史に於いて永遠に記念せらるべき日、否更に、全人類の精神史に於いて人類の精神が眞實に自己の深みに徹し得た日として遍く祝がるべき日である。

此の如き日は嘗て釈迦牟尼が菩提樹下に道を成り仏を証したまひし日に於いて現はれた。その日、釈迦牟尼は一切

ぐゆかしき情がにじみ出でる。それだけ祖聖の御言葉の調子が変はつてゐるように私には感ぜられる。然し、聖德太子と法然上人とに於いて觀音、勢至二菩薩の化身を仰ぎ、二菩薩を遣し恵みたまひし如来の大悲に帰命し念佛したまひし祖聖の深き御心は之を偲びまつることが出来る。觀音の化身の久しきに亘る護持養育を蒙りて今のち親しく勢至の化身から智慧の念佛を伝へしめられ、茲に永しへに生死を出で後世を照らすの大道が明らかになつたのである。

其の明らかになつた経路は祖聖親ら之を次の如く告白してをられる。教行信証化身土巻に言はく、「是を以て、愚癡釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依りて、久しう万行諸善の仮門を出で、永く双樹林下の往生を離る。善本德本の真門に回入して、偏に難思往生の心を發しき。然るに今特に方便の真門を出でて、選択の願悔に入り、深く御恩を知れり。至徳を報謝の為に、真宗の簡要を摭うて、恒常に不可思議の徳悔を称念し、弥々斯を喜愛し、特に斯を頂戴する也。」

是れ遍く三願転入の文として知られる、祖聖の入信の歴程の御告白である。此の文を如何に領解しまつるべきか。私共は各々身を以て之を味ひ察へねばならぬ。

の衆生をわが一人子とみそなはす仏の大慈大悲心を証して如來の願を身に顯したまうたのであつた。今祖聖は、その如來の願を開いて自ら如來の一人子であつた事を身に証しまたまうた。こゝに釈迦牟尼の教を一切の衆生が悉く各々身上に証し得るの道が開かれた、そしてそれは正しく三朝淨土の大師等の哀愍攝受したまへるに由る、特に之を代表して聖德太子と法然上人との深き護念を被らせたまへるに由る、と祖聖は念佛し讚歎したまふのである。

御伝鈔上第三段に「聖人後のとき仰せられて云はく、仏教むかし西天より興つて經論いま東土に伝はる。是れひとへ上宮太子の廣德山よりも高く海よりも深し。我が朝欽明天皇の御宇にこれを渡されしによつて、すなはち淨土の正依經論等この時に來至す。儲君もし厚恩を施したまはずば凡愚いかでか弘誓にあふことを得ん、救世菩薩はすなはち儲君の本地なれば、垂跡興法の願をあらはさんが為に、本地の尊容を示すところなり。抑又大師聖人源空もし流刑に処せられたまはずば我亦配所に赴かんや。もしわれ配所に赴かずんば何によりてか辺鄙の群類を化せん。是れなほ師教の恩致なり。大師聖人すなはち勢至の化身、太子又觀音の垂跡なり。是の故にわれ二菩薩の引導に順じて如來の本願を弘むるにあり。」云々と伝へてある。此御語の調子には鈔の著者覚如上人の祖聖を本願寺の聖人として敬ひ仰

此の文には明らかに三門・三往生が述べられてある。先づ初に万行諸善の仮門に在りて双樹林下の往生を期してをられたことが思はれる。双樹林下の往生とは釈迦牟尼仏の入滅を想はしめる語であるから、此の門は釈迦牟尼の如く万行諸善を修めて成仏する道であると云ふべき如くである。然しそは其處にて直に成仏するのでなく、成仏の為に其處から他に往生せねばならぬ門であり、而も其のみで真に往生し得るとは云ふを得ざる仮の門である。釈迦牟尼の入滅は仏の化議であるから其自ら真実であるけれども、親鸞にありては、単なる求道の凡夫に過ぎず、たゞひ如何に万行諸善を勤め修むるとも悉く是れ虚偽の行たり雑毒の善たるを免れざるが故に、是往生の為に仮門と云はねばならない。但し之を虚偽雑毒たり仮たらしむるは求道者の為す所にして、而も之を往生の門たらしむるは此の如き求道者に注がるゝ如來の大慈の智である。如何にしても虚偽を離れ得ざる者のために仮の門を開いて眞實に転じ入らしめる。如來の大慈は常に衆生の機に応じて融け入り作きたまうのである。

此の万善諸行の仮門とは、祖聖之を如來の第十九願に誓ひたまへる所に名づけたまうた。願文に言はく、「設ひ我れ仏を得むに。十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修め、心を至し發願して、我が國に生まれむと欲

罪業の凡夫が既に如來のひとりごたりしを知らしめられし稀有の刹那の崇き自覺の表現である。則ち其の初の一門を窺ひつゝあるのであるが、今の微意は専ら祖聖の御生涯を窺ひまつりたく思ひつゝ叙述図らず此に至つたのである。第十九願文に「菩提心を發し、諸の功德を修め」とある。是れ凡そ仏道を学ぶ者の根本的要要求である。苟くも菩提を求むる心を發すことなくして如何にして仏道を学び得よう。人と生まれて人たる理想を證さうとの願ひなくして如何にして眞實に生き得よう。一たび菩提心を發す、其の發心のまゝに諸の功德を修める、則ち諸善万行を勤める、此の發心勤修のままに菩提が証されるのであつて、是れ釈迦牟尼の証したまひし三世諸仏の教・一切諸菩薩の道である。わが祖聖の若々しき魂の廿年、山に在りて勤苦したまひしは即ち此であつた。然るに

「正法の時機とおもへども

底下の凡愚となれる身は

清淨真実のこゝろなし

発菩提心いかゞせん。

自力聖道の菩提心

こゝろもことばもおよばれず

常没流転の凡愚は

いかでか發起せしむべき。

三恒河沙の諸仏の

出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども

自力かなはで流転せり。」

此等は祖聖の晩年の御作であるけれども、若かりし日の体験の血のしたゝる御追憶たるを思はしめる。諸善万行は定

はむ。寿終の時に臨んで、仮令、大衆と共に圍撲して其の人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ」と。
此の願の意を祖聖讀めて言はく

「至心・發願・欲生と 十方衆生を方便し

衆善の仮門をひらきてぞ 現其人前と願じける。

臨終現前の願により 釈迦は諸善をことごとく

觀經一部にあらはして 定散諸機をすゝめけり。

諸善万行ことごとく 至心發願せるゆゑに

往生淨土の方便の 善とならぬはなかりけり。

願文と讀歌とを相照らして之を窺ふ。

思ふに、三願転入の法門は、祖聖が御自の入信の歴程を省みると共に、其の始終一切に亘つて如來の悲願常に之を護り導きてあらせられし不思議の事実を感得し、而も其が悉く釈迦牟尼仏の經言によりて証せられてありし事を見出し、其の慶喜の中に多年の思惟を経て、此の化土卷に至りて今之如くに表現せられしものである。則ち是れ釈迦仏の一切經を淨土の三部經に收め、三部經を大經に收め、大經を第十八願と其の成就の文とに收め、之をすべて「親鸞一人がためなりけり」と頂戴したまふ事に由りて「一切群生海」とともに「光明の廣海に浮び」たまひし大いなる歴史の表現である。釈迦牟尼の正覺の中に証されて説き出でられし阿弥陀如來の本願が直に苦惱の群生海に受け入れられ、

散二善に收められる。然るに常没の凡愚、定善を行めんとすれば、慮を息め心を擾らすこと能はざるが故に、定心修め難く、散善を行はんとすれば、惡を廢め善を修むること能はざるが故に、散心行じ難く、是故に、古賢の語に、たゞひ千年の寿を尽くすとも法眼未だ曾て開けずと云える如くである。之に由りて「おほよそ今生においては煩惱惡障を断ぜんこときはめてありがたきあひだ、真言、法花を行ずる淨侶なほも順次生のきとりいのる」(歎異抄)のであるが、今、祖聖は、山の常行堂の堂僧として、念佛三昧を修めつゝある身に在すが故に、おのずから至心に發願して弥陀の淨土に往き生まれ、彼處にて菩提心を成就せんと欲せざるを得ない。此の如き欲生心に応じて如來の大悲心は臨終現前を誓はせたまうた。是第十九願の言ふ所である。然し淨土への往生が臨終に於いて仏の来迎現前を見る事によつて証せられる、其まゝは証せられない。藤原時代の貴族ならば其處に慰安を見出し得たであろう。鎌倉時代の求道の青年にもつと直接現実的なるものが要求せられる。念佛三昧の堂僧、而も汝命根應十余年と告げられたる時にも年々に迫られつゝある堂僧にとつて、此の願の体験は必然に転じて第廿願の示す所即「善本德本の真門」に入らしめらるゝ「仮門」とならざるを得なかつたのである。

編集後記

六月十五日夜、「善知識を訪ねて」の題で四十華嚴の上で善財童子の求道の第一回の講話を福島先生から拝聴。私は基督教には、聖書に次ぐ書として有名なパンヤンの天路源程といふ求道物語がありますが、仏教の夫れに相応するものが、善財の求道である、華嚴經の入法界品であるとはかねてから知られながら手もつけられないまま、で居りました。幸にこの縁が恵まれましたことは有難いことあります。特に四十華嚴では、善財童子が最後に文殊菩薩と普賢菩薩によつて西万弥陀の淨土に往生するといふ大切な教があります。いずれ誌上で御読み頂けますことあります、聴者も説者も生命あれかしと感じられます。

六月初旬、白井先生の御葉書により今夏は御郷里での御講話中止のこと。次で榎原さんから先生の御入院の通知を頂きました。昨年は私が御見舞頂きましたのに、感無量であります。御恢復すみやかなれと念じ上げます。

京都の自照舎の今田彰夫さんの逝去は、私は身近なる痛ましさを感じられてなりません。すでに忌明もすぎ、一入お淋しいことであります。

本月号は近角先生初め皆様の青色青光・白色白光・黃色黃光の信味を頂きました。来月は常音先生の御正忌の月であります。何か先生の徳音を頂きたいものと願つて居ります、私共は御在世の時は、何時でも聞ける、東京に行けばお会ひ出来る、と横着な油断の中に空しく過して参りました。愚鈍な身を恥ぢ入るばかりであります。

私は最近、聖人の御隠遁といふことについて、あまりにも浅く考へて居りましたことを知られ、相済まぬことと思つて居ります。「改邪鈔」の中に、常の御持言には

「私は是れ賀古の教信沙弥の定なり」と、

覺如上人に如信上人は口伝して居られます。御隠遁にも色々ありまして、この奥に世捨て人ありと立看板をする偽装の隠遁。次に自身は世を捨て乍ら世間がその人を捨てない隠遁。更に、自身が世を隠れて世間もその人を忘れて知らぬと云ふ大隠遁であります。教信沙弥はさうした大隠遁の人であります。そして聖人の晩年の三十年の御生活は、御自らは「名利に人師とのむなり」と慚愧されてゐられます。そこに私共にはそのまゝ内心に仏法を深くたくはへられて外相に後世者らしき御姿が消えて居られたと拝するのであります。この大隠遁の人にして、道と人とは一つにとけて、何千年経つても、何万年経つても錯びず疊らず消え

ぬ金言実語が湧き出る。そしてその人の叫びが老少善惡を問はず、そのままわがこととしてひびいて来る。「無位の真人」を仰ぎ、且は我が身心の臭穢、汚濁の限りに驚くばかりであります。

御案内

毎月廿四日、午前、午後一時半、日曜講話。一道会館。市電、新郊通り一丁目下車、東入ル一丁半。通下車。桜花学園東側。風呂屋隣。

毎月廿四日、午前、午後。法話会。

昭和区小桜町、教西寺。市電御器所

新郊通り一丁目下車、東入ル一丁半。

定価一部二十円(送共)半 年 百二十円(送共)

一 年 二百四十円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八
編集・発行人 花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走三八

印 刷 人 本 田 政 雄

名古屋市南区駄上町二ノ二八

發 行 所 慈 光 社

振替口座名古屋一〇四七〇番